

## 伊谷純一郎 年譜 (敬称略、年齢は各年の満年齢を示す)

1926年(大正15/昭和元)

5月9日、伊谷賢蔵(画家)とちよの長男として鳥取市西町に生まれる。生後、約1ヶ月で両親の居宅があった京都市日ノ岡に移り、以後、何度か転居するも京都市で育つ。

1939年(昭和14:13歳)

4月、京都府立京都第三中学校(現・府立山城高校)に入学。

1944年(昭和19:18歳)

3月、同校を卒業。4月、鳥取高等農林専門学校・獣医畜産科に入学。

1945年(昭和20:19歳)

春、学徒動員令により兵庫県川西市の陸軍獣医資材支廠で働く。

1947年(昭和22:21歳)

3月、同校を卒業。京都大学理学部動物学科を受験したが不合格。

1948年(昭和23:22歳)

同大学農学部応用植物学研究室の今村駿一郎教授のもとで働く。  
4月、京都大学理学部動物学科に入学。動物生態学講座(宮地伝三郎教授)に所属。10月、今西錦司(当時は講師)について宮崎県の都城から都井岬まで行き、野生馬の調査に従事。最初の本格的なフィールドワークとなる。同行は川村俊蔵(当時は学部の三回生)。ある日、鯨ヶ背でニホンザルの群れに出会い、その社会を研究したいという強い思いをいただく。12月3日、野猿が天然記念物に指定されていた幸島を3人で訪問、ニホンザル研究の出発の日となる。

1950年(昭和25:24歳)

4月、大分県高崎山の調査に従事。川村と伊谷が先行して、あとから今西が合流。帰りに宮崎県との県境の山中にある営林署の事業所においてパイケイソウを食べて中毒を起こす。この年から翌年にかけて何度も幸島や高崎山での単独調査をおこなう。

1951年(昭和26:25歳)

3月、京都大学理学部動物学科を卒業。卒業論文は「ニホンザル *Macaca fuscata fuscata* 社会生態学的研究」。4月から1954年3月まで京都大学大学院研究奨学生(前期)の身分で理学部に在籍。6月、靈長類研究グループを結成。代表に宮地、中心メンバーは今西、川村、間直之助、徳田喜三郎、河合雅雄、伊谷。

1952年(昭和27:26歳)

7月に川村とともに屋久島での調査に従事。幸島では徳田と協力して初めてニホンザルの群れの餌づけに成功。また、下北半島、十和田、三面、北小国などでも調査。

1953年(昭和28:27歳)

4月、高崎山がニホンザル棲息地として天然記念物の指定を受けたことを機に、高崎山管理事務所のアドバイザーとして着任し、ニホンザルの観察と原稿の執筆に専念する。

1954年(昭和29:28歳)

4月、京都大学大学院理学研究科に入学。12月、初めての著作『高崎山のサル』(光文社)を出版。また文部省科学映画『ニホンザルの自然社会』の製作に協力(ヴェネツィア国際映画祭で特別賞を受賞)。

1955年(昭和30:29歳)

11月、「高崎山のサル」により毎日出版文化賞を受賞。

1956年(昭和31:30歳)

2月、靈長類研究所設立の調査のために愛知県犬山を訪問。4月、京都大学教養部非常勤講師となる。5月、中田伊津子と結婚。9月、京都大学大学院理学研究科を退学。10月、財団法人日本モンキーセンターが発足、研究員となる。11月、雑誌『モンキー』創刊。

1957年(昭和32:31歳)

10月、長男・原一誕生。12月、世界初の靈長類学の学術誌『Primates』を創刊。

1958年(昭和33:32歳)

(第1次ゴリラ学術調査)(日本モンキーセンターの資金による)。2

1959年(昭和34:33歳)

1960年(昭和35:34歳)

1961年(昭和36:35歳)

1962年(昭和37:36歳)

1963年(昭和38:37歳)

1964年(昭和39:38歳)

1965年(昭和40:39歳)

1966年(昭和41:40歳)

1967年(昭和42:41歳)

月、今西と共にゴリラとチンパンジーの予察、海外の靈長類研究者との面談などを目的として、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ各地を歴訪、7月に帰国。

〈第2次ゴリラ学術調査〉4~9月、河合と水原洋城がウガンダでマウンテンゴリラを調査。『Primates』を英語版で発刊。

1月、仮領カメリーンが独立。6月、ベルギー領コンゴがコンゴ共和国として独立、すぐに動乱が始まる。〈第3次ゴリラ学術調査〉。7~10月、伊谷が単独でウガンダとタンガニイカ(タンザニア)に行き、マウンテンゴリラとチンパンジーの調査をおこなう。この年にはJ.グドール(イギリス)もチンパンジー研究のためゴンベ・ストリームに入り、A.コルトランド(オランダ)も西アフリカからコンゴ・フォレストに向かっていた。

1月、次男・樹一誕生。〈京都大学アフリカ類人猿学術調査〉(文部省科学研究費による。代表:今西)。10月、伊谷が先行者として東滋と共に出発。タンザニアのタンガニイカ湖畔のカボゴ山塊で調査と基地の設営に従事。今西、富川盛道、富田浩造、片寄俊秀がタンザニアへ。12月、タンガニイカがイギリスから独立。

1月、カボゴのムクユの浜に調査基地が完成。2月、理学博士(京都大学)の学位を授与される。4月、タンザニアから帰国。5月、豊鶴(西邨)顕達がカボゴへ。10月、京都大学理学部に自然人類學講座が開設され、今西が初代教授、伊谷は池田次郎とともに助教授の職を得る。

〈京都大学第2次アフリカ類人猿学術調査〉。新しく梅棹忠夫、和崎洋一、端信行などが参加。伊谷は10月に伊沢紘生とカボゴへ行く。予備調査を重ねたうえ12月に基地をカボゴから直線で約20km離れたカサカティに移る。新基地を中心に調査を続行。12月、ケニアがイギリスから独立。この年、国際靈長類学会が発足。

〈京都大学第3次アフリカ類人猿学術調査〉。新しく藤岡喜愛、日野舜也、和田正平、福井勝義などが参加。前年度から滞在していた伊谷は3月に帰国。4月、タンザニア連合共和国が成立。日本アフリカ学会が設立され、学術雑誌『アフリカ研究』発刊。

〈京都大学第4次アフリカ類人猿学術調査〉(今西が京都大学を定年退官し、以後は伊谷が代表となる)。1月、カナダでの国際学会出席の後、鈴木晃とともにカサカティに入り調査、2月に帰国。8月、伊谷、加納一男(隆至)、西田利貞がカサカティに入り、鈴木や伊沢とともに調査に従事。9月3日、フィラパンガでチンパンジー集団の行列を観察。9月中旬にウガンダのブドンゴの森を予察。10月に帰国。

〈京都大学第5次アフリカ類人猿学術調査〉。新しく米山俊直、杉山幸丸などが参加。西田がカソゲでチンパンジーの餌づけに成功。伊谷は8月にアフリカへ。キゴマでの協議の後、加納とフィラパンガに向かう。ウガラ川までのサファリを敢行し、ここがチンパンジーの分布の東限であることを確認。カソゲ、ンクングウェ山、ルゲフ盆地等を踏査。マンゴーラ村で狩猟採集民ハッザを調査。10月末に帰国。英文学術誌『Kyoto University African Studies』発刊。

〈京都大学第6次アフリカ類人猿学術調査〉。6月、京都大学附置全

1968年(昭和43:42歳)	国共同利用霊長類研究所設立(所長:近藤四郎)。11月にアフリカ入り。マラウイ湖西岸でチンパンジーの分布を調査。カソゲでの調査後カルルンペータ山を縦走、カボゴに達する。12月下旬にブドンゴの森で鈴木と合流し調査。
1969年(昭和44:43歳)	1月中旬に帰国。この年から翌年にかけて大学紛争が活発化する。1月、(宮地伝三郎・今西錦司を代表とする霊長類研究グループ)に対して1968年度朝日賞が授与される。
1970年(昭和45:44歳)	<野生チンパンジーの社会構造とサバンナへの適応についての学術調査>(文部省科学研究費による)。1月下旬にアフリカ入り。キゴマで川中健二と合流。カサカティに入り、ルグフ盆地横断を試みるもボーターの病気で計画を中止する。2月に帰国。3月、父・賢蔵が他界。
1971年(昭和46:45歳)	<野生チンパンジーの社会構造と原始農耕民の乾燥林地帯への適応についての学術調査>(ヴェンナーグレン人類学研究財団の基金による)。妻・伊津子、掛谷誠、英子夫婦、田中二郎一家とともに4月にアフリカ入り。カソゲ基地を中心にトングウェの生態人類学的調査に着手。ミバンガ、イグンガ、ブスングウェなど幅広く踏査。7月に帰国。
1972年(昭和47:46歳)	<アフリカの森林・オープンランド境界域における野生チンパンジーと未開狩猟採集民の生態学的研究(第1次)>(文部省科学研究費による)。8月、アメリカでの国際学会に出席した後にアフリカ入り。カソゲを出発してルグフ盆地を横断し、イルンビに達してカソゲに帰着。10月、原子令三と共にザイールでムブティ・ビグミーを調査。11月末に帰国。この年、霊長類の社会を俯瞰して進化を論じた最初の労作『霊長類の社会構造』(共立出版)を上梓。
1973年(昭和48:47歳)	5月、東京の学士会館で第1回生態人類学研究会が開催される。以後、毎年1回開催し、後の生態人類学会の母体となる。伊谷は、1974年から80年にかけて度数にわたって国内科学研究費を申請・取得し、主として沖縄地域を対象として生態人類学的な研究を推進する。<アフリカの森林・オープンランド境界域における野生チンパンジーと未開狩猟採集民の生態学的研究(第2次)>(これ以後文部省科学研究費による)。11月、ロンドンでの自然保護の会議に出席の後、アフリカ入り。イトゥリの森、カソゲなどでトングウェのほかムブティ・ビグミーを調査。
1974年(昭和49:48歳)	2月に帰国。<野生ビグミー・チンパンジーの社会・生態学的研究>(文部省科学研究費による。代表:加納)。7月、オーストリアでの霊長類学の国際シンポジウムに出席。11月にカソゲに入る。
1976年(昭和51:50歳)	1月に帰国。日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターで田中、市川光雄と共に駐在員として過ごす。ケニア北部で牧畜民ソマリ、サンブル、トゥルカナ、ガブラ等の予察をおこなう。
1978年(昭和53:52歳)	<ケニア北部乾燥地域における遊牧民、農牧民の生態人類学的研究>(文部省科学研究費による。代表:田中)。7~9月、第1回のトゥルカナの調査。
1979年(昭和54:53歳)	8月と12月にマハレ山塊国立公園建設の調査のためタンザニアへ。
1980年(昭和55:54歳)	<赤道アフリカにおける生態人類学的研究>(文部省科学研究費による。代表:田中)。8月、第2回のトゥルカナ調査。
1981年(昭和56:55歳)	カナ調査。10月に帰国。
1982年(昭和57:56歳)	7月、京都大学理学部に人類進化論講座が開設され、教授に就任。欧文学誌『African Study Monographs』が創刊される。
1984年(昭和59:58歳)	<乾燥帶アフリカにおけるヒトの行動と適応に関する研究>(文部省科学研究費による。代表:田中)。6月、第3回のトゥルカナの調査。8月に帰国。
1985年(昭和60:59歳)	11月、ロンドンでトマス・ハックスリー記念講演をおこない、記念メダルを授与される。演題は『The Evolution of Primate Social Structures』。英国王立人類学協会名誉会員となる。
1986年(昭和61:60歳)	永年の努力の結果、マハレ山塊が国立公園に指定される。タンザニアで11番目の国立公園。
1987年(昭和62:61歳)	4月、京都大学アフリカ地域研究センターが設立され、センター長に就任。
1990年(平成2:64歳)	11月、ザイールで政府の学術機関との共同研究協定に署名。その後の徒步旅行中、ワンバにおいて病氣で倒れ、生死の境をさまよう。日本に送還された後、治療に専念。
1991年(平成3:65歳)	3月、京都大学を定年退官。4月、京都大学名誉教授の称号を授与される。神戸学院大学人文学部教授に就任。6月、兵庫県立自然系博物館設立準備室長に就任(翌年2月末日迄)。8月、母・ちよが他界。
1992年(平成4:66歳)	7月、財团法人大同生命国際文化基金より「アフリカの自然史の研究に関する業績および地域研究の構築と推進」に対して地域研究賞を受賞。
1993年(平成5:67歳)	4月、紫綬褒章を受章。
1994年(平成6:68歳)	ボツワナ、ナミibia、南アフリカを広域調査。
1996年(平成8:70歳)	神戸学院大学大学院人間文化学研究科の創立に尽力。4月、初代研究科長となる。
1997年(平成9:71歳)	3月、生態人類学会が設立される。8月、放送大学特別講義「HUMAN～人間・その起源を探る」のため、コロンビアを取材。
1998年(平成10:72歳)	7~8月、放送大学特別講義「HUMAN～人間・その起源を探る」のためカメリーンでビグミーの調査。9月、財團法人中山科学振興財団より1996年度の中山賞を受賞。11月、歓三等瑞宝章を受章。
1999年(平成11:73歳)	台湾における鳥類の民族動物学および生物地理学の研究のため、3度にわたって渡航。
2001年(平成13:75歳)	3月、神戸学院大学を定年退職。4月、神戸学院大学名誉教授の称号を授与される。9~10月、放送大学特別講義「HUMAN～人間・その起源を探る」のため、ケニア、タンザニア、南アフリカ、ボツワナを取材。また、幸島、都井岬、高崎山を視察。病氣のため入院して治療につとめる。
	1月、日本アフリカ学会・関西支部例会(京都大学)にて『アフリカの植生を考える』と題して講演。最後の講演となる。8月19日、京都市にて逝去。従四位を叙位される。

所属学会：日本人類学会、日本民族学会(日本文化人類学会)、日本霊長類学会、日本アフリカ学会、生態人類学会、国際霊長類学会、英國王立人類学協会